

令和7年度 下水道展報告書

山陽終末処理場施設公開(令和7年9月13日(土))

上下水道局 総務課

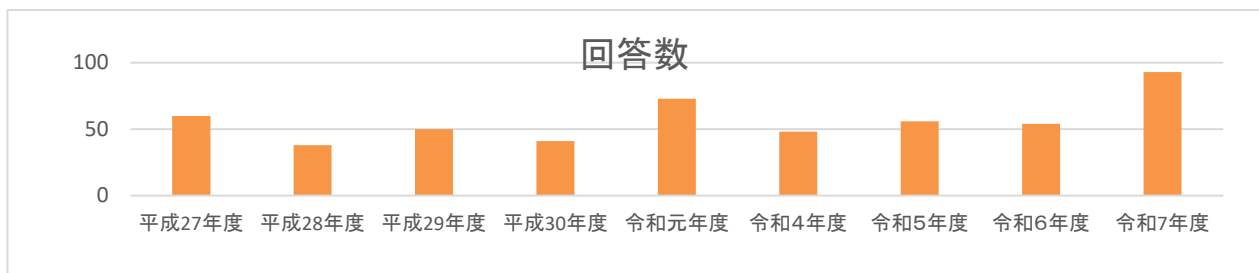
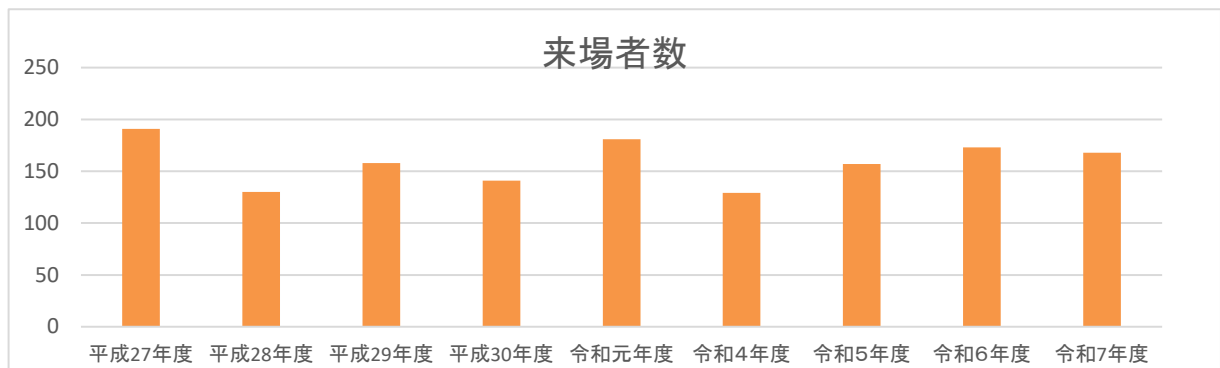
令和7年度 下水道展基礎データ

●施設公開

1. 会場 : 山陽終末処理場
2. 日時 : 令和7年9月13日(土) 午前10時～午後4時
3. アンケート回答数等

年 度	回答数	来場者数	開催場所	備考
平成27年度	60	191	山陽	供用開始50周年
平成28年度	38	130	山陽	
平成29年度	50	158	山陽	
平成30年度	41	141	山陽	
令和元年度	73	181	山陽	
令和4年度	48	129	山陽	
令和5年度	56	157	山陽	
令和6年度	54	173	山陽	
令和7年度	93	168	山陽	供用開始60周年

※令和2・3年度:コロナウイルス感染症対策の為に中止



●習字コンクール作品展

1. 会場 : シーモール1階コンコース
2. 日時 : 令和7年9月4日(木)～9月10日(水) 午前10時から午後7時30分
3. 展示内容 : 入賞作品 書道42点の展示
4. 入賞作品 : 小学生低学年の部 金賞2点、銀賞3点、銅賞4点、佳作5点
: 小学生高学年の部 金賞2点、銀賞3点、銅賞4点、佳作5点
: 中学生の部 金賞2点、銀賞3点、銅賞4点、佳作5点
5. 応募総数 : 書道449点

令和7年度下水道展アンケート結果報告書

I. 調査概要

1. 調査の目的

市民の上下水道局や当イベントに対する評価等を把握し、今後の参考資料とする。

2. 調査対象 山陽終末処理場来場者

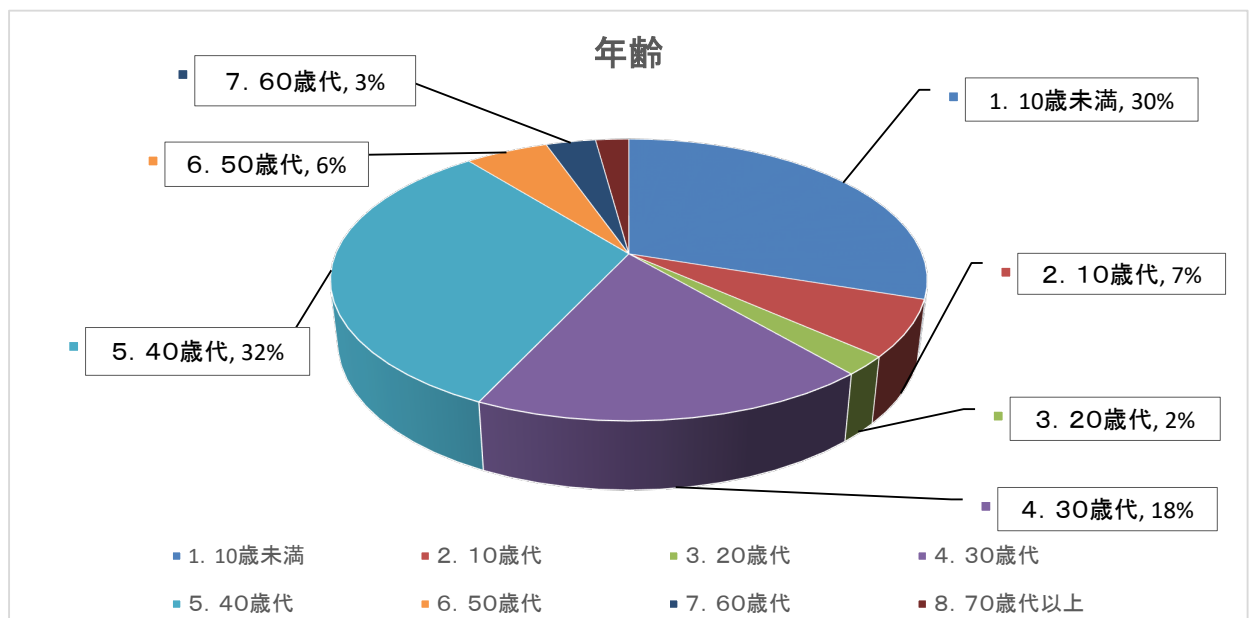
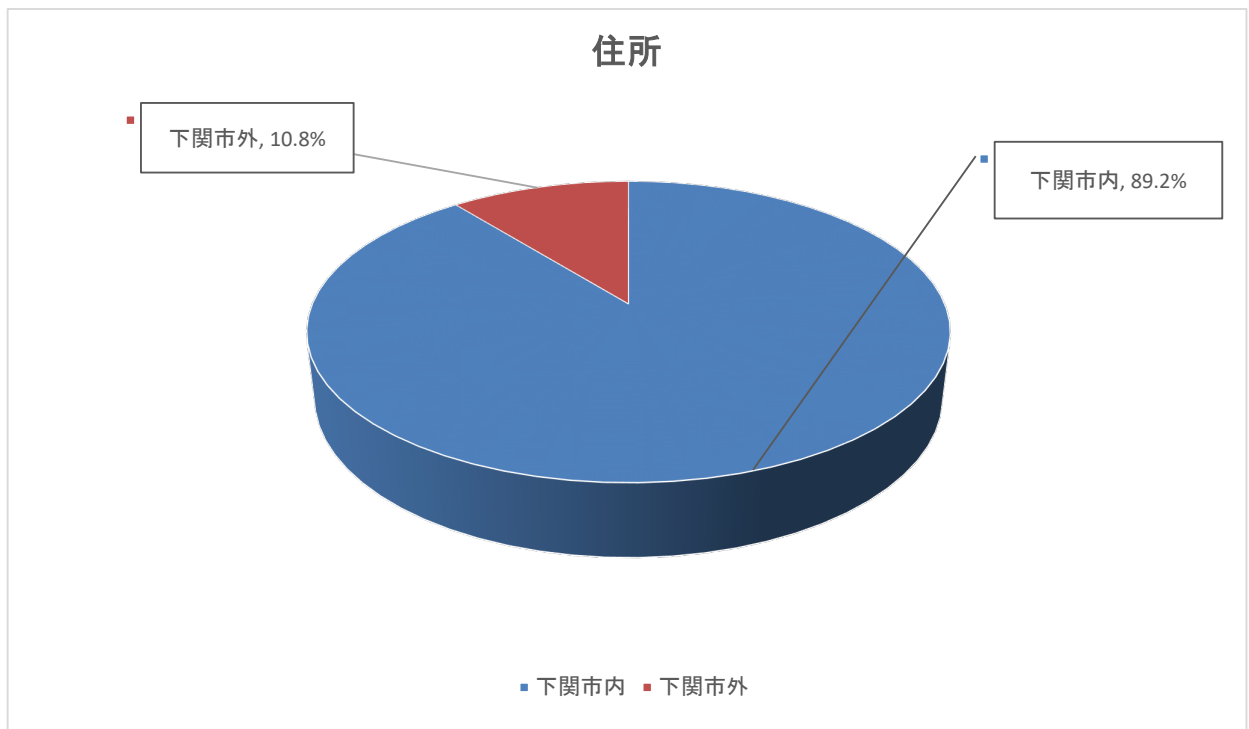
3. 実施期間 令和7年9月13日(土)

4. 調査場所及び調査方法

下水道展会場でアンケート用紙に記入してもらう。アンケートに答えた方に「ああ！関露水」を進呈。

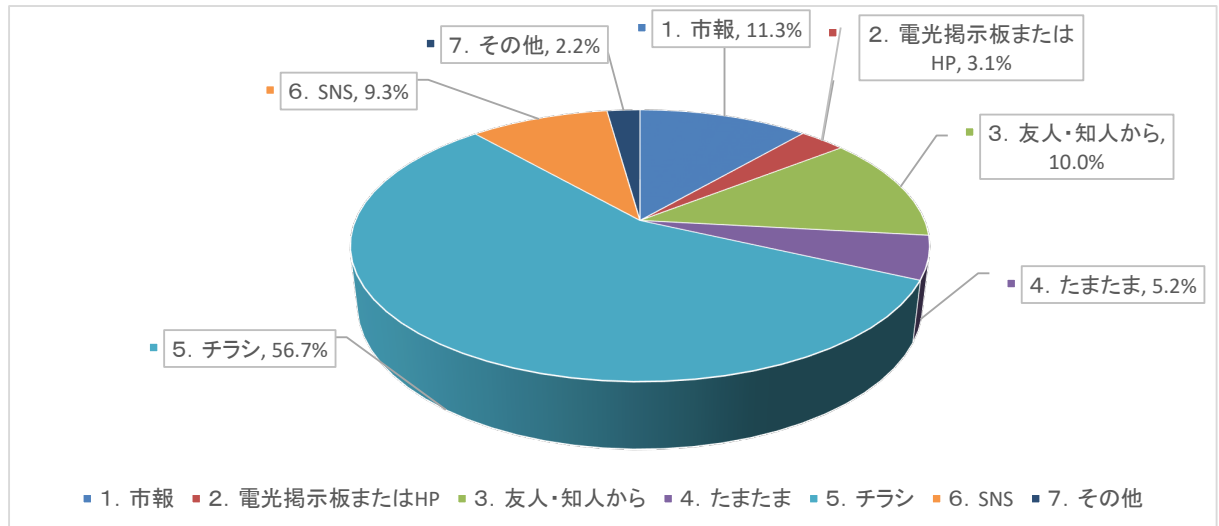
5. 回答者数 93人

6. 回答の内訳

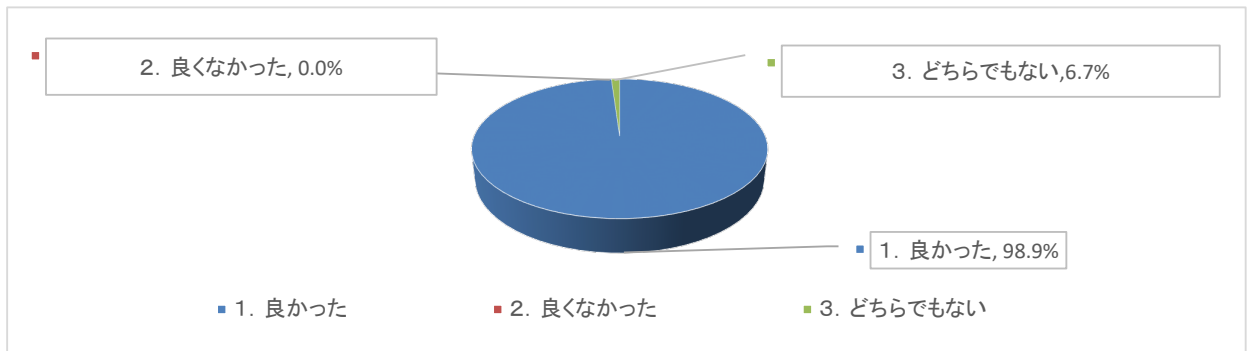


Ⅱ. 調査結果

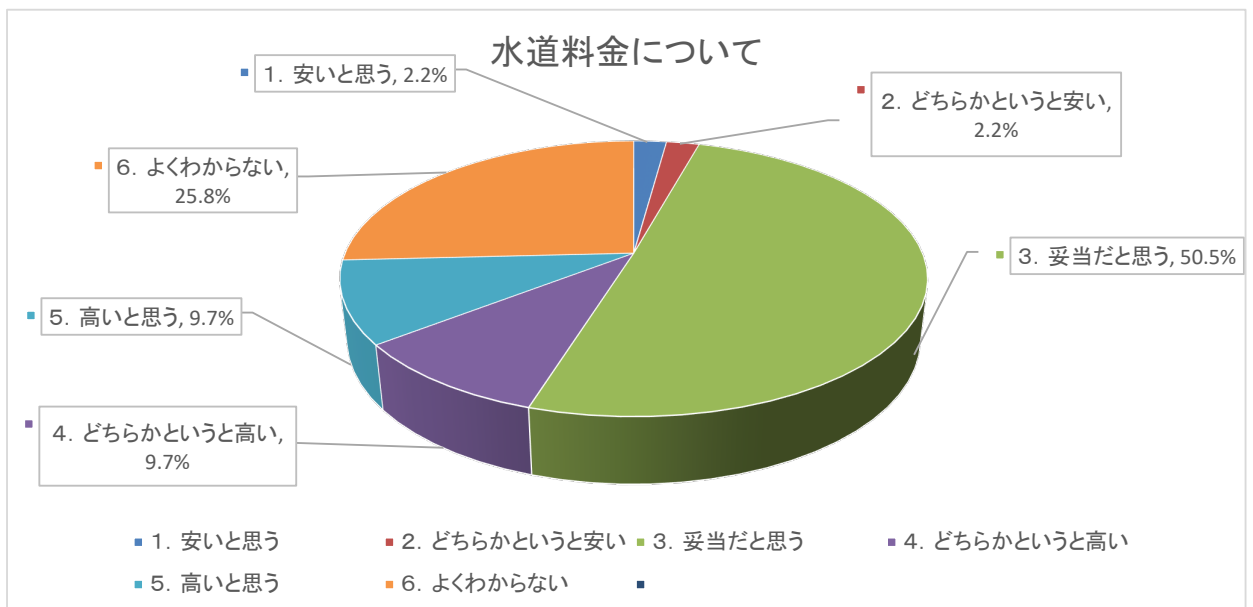
問1 このイベントをどのような方法で知りましたか。

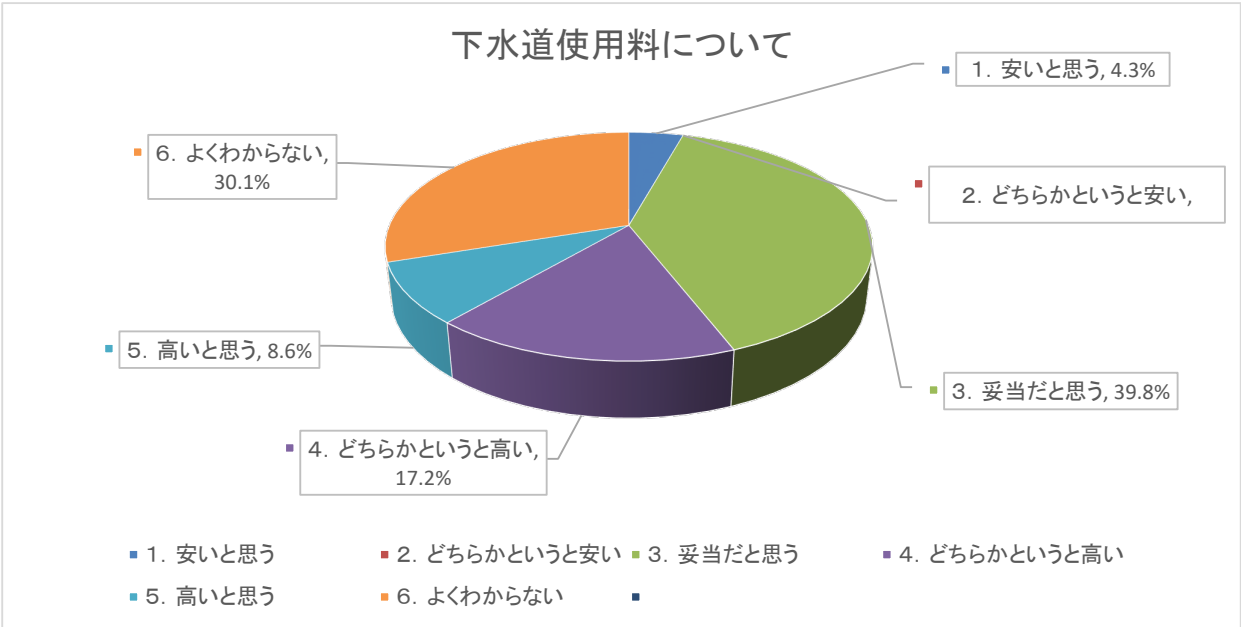


問2 このイベントの感想をお聞かせください。

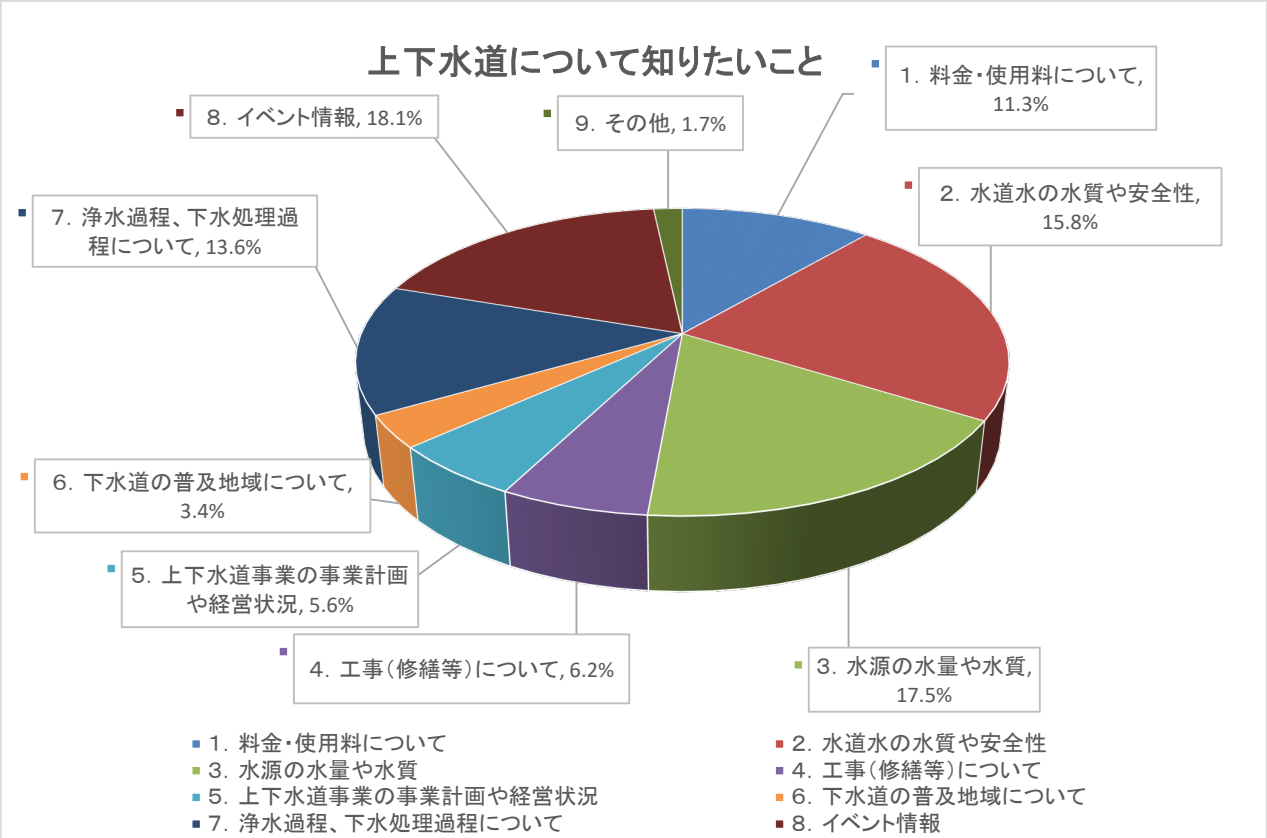


問3 水道料金と下水道使用料についてどう思いますか





問4 上下水道について、どのようなことが知りたいですか。(いくつでもお選びください。)



Ⅱ. 総括

(1)開催時期と来場者数推移

屋外でのイベント開催による熱中症等を考慮して、9月10日の「下水道の日」に近い週末に開催した。

来場者数は168名(うち施設見学者数141名)と前年度(来場者数173名)から微減となった。

(2)来場者の傾向

アンケート結果によると、来場者の89.2%が下関市内からであった。年齢層については、10歳未満が30%を占めており、多くの来場者が小学生のお子さんを連れのご家族であったことがわかる。

これは、前年度の傾向(40歳代が45%で最も多く、小学生の子連れ家族が多い)と比べて、より低年齢層の参加が増加したことを示している。

(3)イベント周知方法

問1の結果から見ると、イベントの周知方法として最も効果的だったのはチラシで、回答者の56.7%がチラシで知ったと答えている。これは、市内の全小学校の児童を対象にチラシを配布した広報活動が成功した結果と考えられる。

また、SNSによる周知も増加した。前年度の3.6%から、今年度は9.3%に増加している。この増加は、市に加えて上下水道局がSNSでの情報発信を開始した効果だと思われる。

(4)上下水道事業への関心

問4「上下水道について、どのようなことが知りたいですか。」に対しては、「水源の水量や水質」が17.5%、続いて、「水道水の水質や安全性」が15.8%と、昨今のPFAS等の話題により、水質関連に関心がもたれている。昨年48.5%だった「料金・使用料について」は、今年度11.3%であった。

(5)料金・使用料への理解

水道料金について、「安いと思う」、「どちらかというと安い」、「妥当だと思う」と回答した人の合計は54.9%であった。一方、下水道使用料については、同様の回答の合計が44.1%であった。

これらの結果を踏まえ、今後もイベントや広報誌を通じて、料金・使用料に対する市民の理解を深める努力が必要である。

(6)下水道展全般について

問2の「このイベント全体の感想をお聞かせください。」の問いに対して、98.9%が「良かった」と回答。

普段見ることができない処理場の見学を通じて、下水道処理の仕組みについて学べたことや、職員による分かりやすい説明が好評だったことを示している。

今後も、教科書だけでは学べない体験を提供することで、下水道への関心を深めてもらえるよう、取り組みを継続していくべきである。